

「子ども防災力トレーニングキャンプ」

～防災リーダーになろう～

平成 23 年 12 月 23 日（金）～25 日（日）2 泊 3 日



I 事業の背景（必要性）

平成 23 年 3 月 11 日，東日本大震災が発生し，改めて子ども達への防災教育の必要性が提唱されています。

そこで，青少年教育施設の特徴を活かし，避難所生活体験や体験活動プログラムを取り入れた「体験型防災教育プログラム」の開発を目指し，本事業を実施した。

II 事業の概要

1. 趣 旨

「東日本大震災」を契機に，子ども達に災害に備える力を身につける必要性が，より一層提唱されています。

そこで，本事業では，講話や自ら考える場面を設定した実習等を通じて，防災に関する基本的な知識や技術を身につけるとともに，適切な避難行動がとれるように判断力や行動力を高め，災害に対応する強い意志をはぐくみます。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

本事業の趣旨・内容に関心と意欲のある小学校 4 年生～6 年生 60 名

(2) 参加状況 参加児童数 34 名

<内訳>

	男子	女子	合計
4 年生	13	5	18
5 年生	3	9	12
6 年生	1	3	4
合 計	17	17	34

<参加地域>

	男子	女子	合計
御殿場	5	6	11
沼津	7	3	10
裾野	2	4	6
三島	1	2	3
小山町	0	2	2
甲府	2	0	2

(3) 広報の方法

- ①募集チラシを作成（業者印刷）（資料 1）
- ②御殿場・沼津・裾野・三島市と小山町の各小学校 4 年生～6 年生の全児童に配付
- ③静岡県内の各教育委員会，山梨県の近隣教育委員会に広報を依頼
- ④HP に掲載
- ⑤静岡県内，及び地元新聞社に掲載依頼

3. 日 程

23日 (金)	10:15	10:30	11:00	12:00	13:30	15:00			
	始めの会 オリエンテーション	交流 ゲーム	災害と避難	昼食	「起震車」体験 「煙ハウス」体験	避難所生活トレーニング ・避難所生活とは ・避難所生活疑似体験			
24日 (土)	9:00	12:00			13:00	17:00 18:00 19:00			
	朝食	避難行動トレーニング		昼 食	避難行動クイズ ラリー	ストレス軽減の 方法	夕 食	入 浴	避難所ででき ること
25日 (日)	9:00		10:30		11:00				
	朝食	まとめ (発表)	終わりの会	解散					

4. 内 容 (活動の様子)

(1) 「災害と避難」(講話) 講師：静岡県ふじのくに防災士 川口 聡 氏

地震や津波などの自然災害はどのようにして起こるのか、地震発生後に予想される2次・3次災害について、地震が発生した後、人々の生活はどのように変わっていくのかについて話をされた。

(2) 「起震車」「煙ハウス」体験 講師：御殿場市・小山町消防署

34名が6つのグループに分かれて交代で体験した。

「起震車」では、過去に日本で発生した地震（例えば阪神淡路大震災）と同じ震度を体験した。

「煙ハウス」では、火災が発生した時の煙の状況を体験した。

指示無しで1回目を行った後に、学校での避難訓練の時はどうしていたかを考えさせ、2回目を行った。

このことにより、ハンカチで口を押さえる意味を体感することができた。



(3) 「避難所生活トレーニング」(実習) 講師：静岡県ふじのくに防災士 川口 聡 氏

避難所での生活はどのようなものかを疑似体験しました。

- ・ダンボールとレジャーマットを使用しての間仕切り、空間作り
- ・毛布や寝袋を使用しての就寝
- ・水道が使えなくなった時の屋内トイレでの水の流し方
- ・非常食での食事



(夕食：おにぎり2個と水，朝食：菓子パン1個，昼食：おにぎり2個とみそ汁)

※ キャンプ2日目の午後までは、電気，水道，ガスが使用できない生活を疑似体験した。

※ 当初，講師として予定をしていた宮城県南三陸町の職員から送っていただいた，東日本大震災のDVDを夜に視聴した。

(4) 「避難行動トレーニング」(講義・演習) 講師：静岡県ふじのくに防災士 川口 聡 氏

日常生活における様々な場面での避難の仕方や、非常時に持ち出す物としてふさわしい物などについて考えた。

- ・学校での避難訓練を思い出そう
- ・家の中（リビングや自分の部屋）での危険箇所を見つけ出そう

- ・非常時に持ち出す物を考え、グループで3つにまとめよう
- ・避難するときに安全な道を探そう

(5) 「防災知識と行動力を高める避難行動クイズラリー」 国立中央青少年交流の家 職員

避難時には的確な情報収集力と判断力、そして行動力が必要とされます。どのような情報をもとに、どう判断し行動するのか、施設の6ヶ所にポイントを設置し、ワークラリー形式によるクイズラリーを実施した。

各ポイントをどのような順番でまわるかについては、グループで相談することとし、各ポイントには災害避難時に役立つ知識をクイズ方式により20題の問題を出題し、解くこととした。

(6) 「ストレス軽減の方法について」 NPO 法人フェイスBeネット 臨床心理士 加藤 好子 氏

日常生活で驚いたり、恐怖を感じたりする場面を思い出し、その時の身体の様子、気持ちや、行動について考えた。その後自分自身でどのような行動をとることで、気持ちや身体が楽になるかを考えた。

また、ストレスを感じたときに緊張をゆるめたり、リラックスするための簡単なストレッチや体操などを紹介していただいた。

(7) 「避難所でできること」 国立中央青少年交流の家 職員

宮城県気仙沼市の避難所で、実際に小学生が発行した「ファイト新聞」を紹介しながら、自分たちが避難所でできることについてグループで話し合い、全体で意見を確認した。

(8) まとめ（個人・グループ活動）

個人でこのキャンプを振り返り、災害の発生前、災害の発生中、災害の発生後、避難所では、という4つの場面での自分自身の心がけや、実際の活動をワークシートにまとめ、グループ内で発表した。

また最後に、このキャンプの活動を振り返っての感想を一言、一文にまとめ、全員が輪になって1人1人が発表した。

〈主な感想〉

「自分の身は自分で守る」…自分が死んだら、他の人のためにもならない。やっぱり自分は大切だから、自分の身を一番に守る。

「繋がり」…東日本大震災で全国や世界から支援物資が届いて、繋がり糸が結ばれたから。

「仲間」…1人で乗り切れないことでも、仲間が1人でもいれば何でもできるから。

「元気」…元気がなければ食べ物も食べなくて、生きられないから。

「あらためて地震は怖いと思った」…地震で建物を壊して、津波でさらに壊し、すべて持って行ってしまう恐ろしいことです。避難所は寒いし、本当にあらためて怖いと思った。

5. 評価

(1) 評価の方法（アンケート調査の実施）

①参加児童に対して

ア・「キャンプはためになったか、どのようなことがためになったか」や「自分が頑張ったこと、できるようになったこと、考えたこと」について、アンケート調査を実施した。

イ・国立青少年教育振興機構が開発した、「生きる力」の測定・分析ツール「IKR評定用紙（簡易版）」を用いて調査を実施した。

②保護者に対して

「キャンプの印象について」、「お子さんが自身をつけた、成長したと思うこと」についてアンケート調査を実施しました。参加した子ども達に質問紙と封筒を渡し、後日郵送していただいた。

(2) 結果 (資料)

①児童アンケートの結果

- ・ 34人中30人の児童がキャンプは「とてもためになった」、4人が「ためになった」と答えた。
- ・ どの項目についても「とてもためになった」、「ためになった」と回答しており、特に高かった項目は「起震車や煙ハウスを体験した」、「友だちやお姉さん、お兄さんと仲良く活動した」、「他の学校の人と、友だちになれた」である。

②児童 IKR 調査の結果

- ・ 「生きる力」及び上位概念である「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の全てにおいて、変容が見られた。特に「生きる力」では11.1ポイントの向上がみられた。

③保護者アンケートの結果

- ・ 「家族みんなで防災について話をしよう」と言い出し、防災リーダーとしての自覚を少し持つようになった。ぜひ、またこのような普段できない体験をさせてもらいたいです。お金をかけた贅沢なキャンプではなく、「生きること」を学べるような体験をできるといいと思います。今回のように防災力のテーマがあり、ただ、新しい友達、大人と生活するだけではなく、今後の生活に生かせるテーマがあるとすごいと思います。」という評価の声がよせられました。

III 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- ・ 事業を企画する上で、防災に必要な力（防災力）を、地震の発生前・発生時・発生後という3つの時間帯にわけ、それぞれの場面で必要となる知識と技術の内容について、以下のように設定しました。

	知 識	技 術
地震の発生前	・ 過去の地震被害の知識 ・ 地震に対する知識 ・ 避難方法に関する知識	・ 地震に対する備え ・ 非常持ち出し品の備え ・ 避難経路の確認
地震の発生	・ 判断するための知識 ・ 自分を保護する知識 ・ 情報収集の方法の知識	・ 冷静な状況把握 ・ 周囲の状況把握 ・ 情報収集と決断力
地震の発生後	・ ストレス対策 ・ 避難所生活の実態	・ 地震後の生活環境への適応 ・ ストレス解消法
全てに共通する	・ 行動力 ・ 意志 ・ 体力 ・ 共生力	

また、防災力について「防災人間科学」（東京大学出版）では、「助けられる（だけの人）」から「（自分や他人を）助ける人」への変容と、「内閣府中央防災会議報告書」では、具体的にイメージすることができるイマジネーション力、情報をもとに状況を分析・判断・理解する力、知識を結合し最適な判断をし、迅速に行動できる力と定義しています。これらの防災力を習得できるように、プログラム企画した。

- ・ 小学生にとってはプログラム内容が精神・肉体的に負荷が高いことから、募集に際しては、企画意図を理解した上での参加を募ることとした。
- ・ 災害発生後には避難所での生活も予想されるので、避難所生活を疑似体験するプログラムを企画しました。当日は講師の方が都合により不参加となりましたが、実際に震災を体験された宮城県南三陸町の職員の方を講師に招き、講義・実習を企画した。
- ・ 地震や避難所での不自由な生活では、様々なことがストレスになると思われる、そこでストレスの軽減方法について、臨床心理士の方を講師に招き、講義・実習を企画した。

2. 運営のポイント

- ・ 子ども達のグループ編成については、各学年と男女が均等になるように、また1班を6人で編成した。
- ・ ボランティアについては、子ども達の話し合いや、グループ活動が円滑に進められるように、また1人に負担がかかりすぎないように各グループに2人（男女1名）を配置した。

3. 成果

- ・ 昨年、東北地方で大地震が発生したが、今後、同じような地震が日本全国いつどこで発生するかわからない。今回の防災キャンプで疑似体験した起震車や避難所生活は、これからの自分達の生活に現実として起こりうる事態であることを認識するとともに、防災への関心を高めることができた。
- ・ プログラムについて、1日目の講義、起震車・避難所体験から、2日目の避難訓練、行動トレーニングからストレス軽減と、最後の避難所で自分にできることまでを、一連のストーリーとして企画することができた。
- ・ 日常生活とは全く違う環境のなかで寝食を共にしたこと、常にグループで話し合いなどの活動進めたことで、参加した子ども達同士のコミュニケーション力や、人間関係づくりの技能を高めることができた。

4. 今後の課題

- ・ 開催期日が12月23～25日（金～日曜日）となり、祝祭日とともにクリスマス行事と重なってしまったので、開催期日については社会的な行事と重なる日を避けて検討していきたいと思う。
- ・ 12月下旬に開催したことで、寒さ対策が課題となった。健康面を配慮した結果、避難所体験の就寝の際には、暖房ストーブが一晩中必要となった。疑似体験といえども、暖房器具をどの程度利用するかが課題である。
- ・ 企画段階では60名の募集としましたが、活動の充実を図るには30～40名前後が適した人数と思われる。

- ・ 小学生を対象として実施をしたが、避難行動のパターンや、避難所での生活の知恵や知識の伝達、リーダーの育成という点から中学生と小学生を同時募集することも考えたい。
- ・ 避難所生活は疑似体験という形で終了したが、現状の理解を深めるために、長期休暇期間等を利用して被災地でのボランティア活動なども検討していきたいと思う。

5. 参考文献

「生死を分ける 災害とっさの判断力」 三雲大 榎出版
「ポートフォリオでプロジェクト学習 地域と学校をつなぐ 防災教育」
鈴木敏恵 教育同人者
「防災人間科学」 矢守克也 東京大学出版会
「災害情報が命を救う ～現場で考えた防災～」 山崎登 近代消防社
「ファイト新聞」 ファイト新聞社 河出書房新社

担当：佐粧和也 長谷川大地 中村匡寛